

複数の小学校と大学とをオンライン会議システムで結んだ音楽授業の試み

— へき地校と市部の学校との合同学習 —

芳賀 均 (北海道教育大学旭川校) 西山 洋平* (留萌市立緑丘小学校)* 芳賀 真衣** (浜頓別町立浜頓別小学校)** 森 健一郎*** (北海道教育大学釧路校)*** 大野 紗依**** (新冠町立新冠小学校)****

Music Classes by Connecting Multiple Elementary Schools and Universities with Online Conference System: Joint Learning among Schools in Remote Areas and Urban Schools

Hitoshi HAGA, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education
 Yohei NISHIYAMA*, Midorigaoka Elementary School
 Mai HAGA**, Hamatombetsu Elementary School
 Kenichiro MORI***, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education
 Sayori OHNO****, Niikappu Elementary School

概要

へき地・小規模校においては、依然、固定したメンバーによる話し合いで考えの多様性に乏しい、刺激が少なく学習意欲が低迷する、ということがいわれている。そうした、いわばハンディーキャップともいえる状況の緩和のため、本実践では「集合学習」の方法を取り入れ、距離の大きく離れた学校同士、さらに大学ともオンライン会議システムで結んだ形による授業を試みた。こうしたオンライン会議システムを活用した授業は徐々に取組が広がってきているとはいえ、全国的に見ても、未だ取組の歴史が深いとはいえ、特に、へき地校の音楽の授業においては、その効果はあまり明らかになっていない。本実践は、そうした、実践のへき地・小規模校の抱えるハンディーキャップの緩和に係る効果について、実践に参加した学生や児童や教員等の感想をSCATの手法を参考にして分析することを通して示唆を得ることを目的とした。実践の結果、児童にはやりがいや達成感、自信、学習意欲の増加、価値観の変容等が、授業を実施・参観した教員には日頃の授業づくりの悩みの解消や業務への意欲の向上が、授業に参加した学生には児童の力への感心や教員として指導する意欲の向上等が見られ、本実践で行った試みが様々な側面から、へき地・小規模校教育の充実に資する可能性が示唆された。

1 はじめに

『豊かな心を育むへき地・小規模校教育 少子化時代の学校の可能性¹⁾』には、かつて「へき地教育」の用語の含意するものは、「都市部に比して遅れた側面を引き上げる取り組み」という意味で用いる傾向が強かったが、へき地の学校環境を積極的に生かしたへき地・小規模校がもつ可能性を捉え、へき地のパラダイム転換を図るべきと主張されている。筆者(芳賀均・大野紗依・芳賀真衣)は、そのことを念頭に、「複式学級における学年別指導による音楽の授業—へき地・複式校における異単元指導の試み—²⁾」、「複式式の学年別指導における音楽授業を単式学級の学習に転用する試み³⁾」に取り組んできた。

その一方で、へき地・小規模校においては、依然、「固定したメンバーによる話し合いでは、考えの多様性に乏しい」、「刺激が少なく学習意欲が低迷する」ということが囁かれているようである。例えば、児童数の少なさに起因する体育(球技等)や音楽(合奏等)の授業における制約の

存在である。

そうした、いわばハンディーキャップともいえる状況の緩和のため、例えば「集合学習⁴⁾」という方法が取られることがある。「集合学習」で音楽の授業が行われた例としては、近隣3校による「おまつりの音楽(をつくろう)⁵⁾」の実践がある。「普段、自校ではできない学習・活動を行う⁶⁾」という方針のもと、6時間配当で、「全習⁷⁾」と「分習⁸⁾」を巧みに組み合わせた指導となっていた。

このような授業方法を発展させ、距離の大きく離れた学校同士、さらに大学ともオンライン会議システムで結んだ形で実践することを試みた。そのことで、へき地をはじめとする地域の人的資源(音楽を専攻した教員が少ない)の補助や、児童の学習環境に変化と刺激を与えて、学習意欲の向上に資することをねらった。

異なる小学校に通う児童同士が、交流活動や意見交換をしながら学ぶことができるようになり、小規模校における新たな学習スタイルとして期待が大きい。一方で、このようなオンライン会議システムを活用した授業は、徐々に取

組が広がってきているとはいえ、全国的に見ても、未だその歴史が深いとはいえ、特に、へき地校の音楽の授業においては、その効果はあまり明らかになっていない。本実践では、その意義について、実践に参加した学生や児童、教員の感想を分析することによって確認し、今後、各地のへき地・小規模校で、規模や距離等のいわばハンディーキャップを乗り越えるための工夫の一つとしての効果について、示唆を得ることを目的とする。

なお、本稿の題名を先述の「集合学習」や「交流学习」⁹⁾ではなく、「合同学習」としたのは、「学習において、ある一定の集団が必要な場合や異学年集団による学習がより効果的であると思われる場合に行う教育方法をいう」¹⁰⁾との定義を参照したためである。ただし、本実践よりも、さらに小規模の学校における活動を想定したとき、集合学習の方法を組み込むべきと考える。そのため、授業の構成は、集合学習の方法を援用して行う。

2 へき地の教育活動におけるオンライン会議システムの活用

(1) GIGAスクール構想と留意点

2020年からのリモートによる授業の導入は、新型コロナウイルス感染拡大防止が目的であった¹¹⁾ものの、遠隔システムによる授業形態が全国で一斉に導入されたことにより、「へき地・小規模校教育のさらなる質的向上」という点で、大きな可能性を有しているという認識が共有されつつある。

「人間関係の固定化」が欠点として指摘されるへき地・小規模校教育においては、活用の仕方によって教育効果が期待されると考える。

ただし、へき地・小規模校特有の問題として、学校ではなく地域全体のインターネット環境によって、オンライン授業の可否が左右されるという問題がある。GIGAスクール¹²⁾の施策は、国立、公立、私立を問わず、一律に実施された政策である。

しかし、へき地特有の事情として、高速の光回線が導入されていないという実態がある。NTTの資料「2017年3月期 第2四半期 決算補足資料」¹³⁾においては、「人口カバー率」が東日本で95%、西日本で93%と発表されている。すなわち、東日本では人口の5%、西日本では人口の7%が、光回線が整備されていない地域¹⁴⁾で生活しており、当然、その地域の学校や地域では光回線の使用が前提とはならない。

人口に対するコストのバランスを考慮すると、やむを得ない面があるのかもしれないが、教育の機会均等という観点からは憂慮すべき問題といえる。光回線以外の安定したインターネット環境（モバイルルーター等）の利用が対策として考えられるものの、この費用は非常に高額になることから、対策を考えていくことが必要である。

(2) 実践を行う学校との学生の参加を伴う取組の経緯

前年度（令和2年度）についても、浜頓別町立浜頓別小学校（以下「浜頓別小学校」とする）、留萌市立緑丘小学校（以下「留萌緑丘小学校」とする）とともに学生（大学院生を含む）の参加を伴う出前授業を実践した。さらにコロナ禍が激しさを増した令和3年度も、そうした取組をオンラインによって継続した。オンラインによる実践は、実際に現地を訪問して対面で行う実践と同様に、学生には、学習意欲の向上や授業方法に対する価値観の変容、自身の授業に関する技術面への不安からの脱却、実践を行うための環境整備という学校現場についての意識の高まりといった効果が確認できた。また、オンラインによる授業自体に関しては、実践前は授業が成立するか否かという不安をもっていたが、児童の楽しむ姿を見て、次第にオンラインによる出前授業のもつ可能性を見いだしたことが分かった¹⁵⁾。

(3) 実践を行うに当たっての準備状況

実践を行う浜頓別小学校（へき地校）と留萌緑丘小学校（市部の学校）においては、本実践に先立って行われたオンラインによる音楽出前授業（前出、註15）、令和3年6月1日実施）のために機材等の準備が整っていた¹⁶⁾。その実践は、公立小学校のコミュニティスクールの枠組で、定例的・継続的に出前演奏・出前授業といったアウトリーチによる教育実践を行うもので、学生も実践に関わって、新型コロナウイルス感染症対策のためオンライン会議システム「Zoom」(以下、Zoomと記述する)の活用によって行った。そこでは、オンラインで実施する上での技術的なノウハウを蓄積することができた。その内容は以下のようである。

- ・オンラインにおいてはウェブカメラを使用するが、接写することで、部品や演奏時の口元や手元等といった細部を拡大して見せることができる利点を最大限に生かす
- ・学生は、個室（音楽棟練習室）や自宅からパソコンまたはスマートフォンを接続して参加することで、感染症が蔓延する環境下における密集を避ける
- ・司会進行はホストのコンピュータを操作する筆者（芳賀均）が行い、プログラムに沿って次々に各担当学生を交代させていく
- ・小学校の各教室では、担任教員が、演奏を行っている学生の画面を拡大する操作を行ったり、学生の問いかけに対する児童の反応方法（挙手等の動作）を指示したりして授業規律の確保を行う

これらは、動画等を全員で視聴することができる「画面共有」と併せて、本実践に不可欠な方法であり、積極的に活用することとした。

併せて、本実践では、それらに加えて「ブレイクアウトセッション」(少人数による討議等に活用できる機能)を「分習」において活用することを考慮する。

なお、留意点として、本実践では楽器を用いるため、ど

こちらの学校も、通常の活動を行っている教室ではなく、音楽室を使用することで生じる通信環境や器機等の設定を丁寧に行うことがあった。特にマイクの設定については、専ら言語によるやりとりと異なり、少しでも途切れると瞬時に味わいが損なわれてしまう音楽演奏を伴うことから、試行錯誤を繰り返して設定した。活動を円滑に行えるようにするため、音楽室の机を移動して座席の位置を工夫し、全ての児童がウェブカメラに常に映るよう配慮した。

・板書の際には、児童の発言を逐一教員が反復し、文字にしていく。その際、必ず、**音(演奏)**—**理由**—**よす(感じなど)** と、3点を結び付けて、逐一書き取っていく。なお、上記の3点は、どの順で書いてもよい

○音源：レコード (CD) サン＝サーンス作曲『動物の謝肉祭』より「ライオン」「カメ」「ゾウ」「カンガルー」「耳の長い登場人物」「大きな鳥籠」「白鳥」。大学のMT用パソコン設置の教室に準備

3 実践について

(1) 授業の設計

- 形態：浜頓別小学校・留萌緑丘小学校合同学習
- 指導：筆者（芳賀均）をMT（メインティーチャー）として、各担任教諭および参加学生（9名中6名）をST（サブティーチャー）とする
- 題材：音楽的な表現について学ぶ
- 目標：音楽的な表現の仕組みや方法について実感的に理解したり行使したりできるようにする
- 目的：音楽的な表現の仕組みや方法について実感的に理解したり活用したりできるようにする（＝音楽的な表現力を身に付ける）
- 方法：鑑賞と表現の一体化を目指した授業とする。学習指導要領における「〔共通事項〕(1)ア」の趣旨の実現に向け、言語活動の際に内容として「生活経験」を伴わせる¹⁷⁾ことで、実感的な理解を促す。2つの学校間で、クイズを出し合う形による、競い合う要素を伴うことから、表現力を身に付けることへの必然性をもたせ、活動への意欲を高める。また、異学年間（下学年に対する賞賛と上学年に対する尊敬）による学びの効果（先述の、集合学習の趣旨）も期待する
- 準備：（浜頓別小学校・留萌緑丘小学校の両教室に）パソコンを接続したテレビ（授業の際には、各学校では、話者の映る画面を拡大表示する）、ワークシート、銘々に配布できる以上の数量の手持ち楽器、大太鼓等の大型楽器。／（大学）パソコン3台（全体進行用1台と各学級に対応するSTの学生が使用するパソコン2台を用意。それぞれに使用する動画データを保存しておく）、演奏実演をする学生用の楽器各種
- 板書：以下の点を考慮した板書とする。板書は各学級(各教室)にて担任教諭が行う。全体を対象としては、導入時に板書の方法の見本として、MTが最小限行う
 - ・板書は、**知覚**⇔**感受** ではなく、**知覚**—**理由**—**感受** とする。または、**言葉**⇔**サウンド** ではなく、**言葉**—**理由**—**サウンド** とする

(2) 授業の記録

①授業全般の記録

- 日時：令和3年6月11日 10:35-11:20
- 児童：浜頓別小4年生16名・留萌緑丘小6年生30名
- 展開：

	活 動
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽の表現方法と効果の関連について考える ・動物「ライオン」の映像（消音）を観る ・STが明らかに間違っているような音楽表現を実演する ・〈変だ、という反応が多いそうですね。では、みんなでもっと映像に合う音楽を考えましょう〉：動物「ライオン」の（消音）映像を観ながら、実際に聞こえそうな音や雰囲気を想像し、言語化する。その際、教員と児童との対話によって豊かに言語化する（板書する） ・それを踏まえて、様々な楽器で音を出してみ、思い通りの表現ができているか否かを検討していく。密な対話によって、試行錯誤を密に行う。その際、「リズムを決める（つくる）」ことを条件とする
展 開 ・ 全 習	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽の表現方法と効果の関連についての知識を活用しながら音楽表現を考える ・〈動物を音楽で表現する活動であることは分かっていたと思いますが、後で、それぞれの学校に分かれて表現を工夫して、互いの作品を発表し合います。でも、ただ発表するのではなく、クイズにしたいと思います。クイズのやり方は、今から説明します〉 ・〈今から映す2種類の動物の映像のうちの、どちらかを音楽で表します。どちらの動物か、きちんと根拠や理由をつけて、説明してください〉：「白鳥（穏やか）」「小鳥（活発）」の映像を切り替えながら映しつつ、全体演示担当STの2名は「白鳥」の表現を続ける ・〈どちらだったと思いますか〉：知覚と感受を結びつける理由について、教員と児童との対話によって豊かに言語化する ・正解を確認し、1名でも間違いがあった場合は、その理由（さらなる工夫の必要性）について全員で考える

展開・全習	<ul style="list-style-type: none"> ・〈では、次は、それぞれの学校で、今やったのと同様に、2つの映像のうちのどちらかを表す音楽をつくりましょう。きちんと2種類の動物の違いが表せるように工夫しましょう〉 ・〈それぞれの問題は、留萌緑丘小学校6年生は『ウサギ』と『カンガルー』、浜頓別小学校4年生は『カメ』と『ゾウ』のそれぞれどちらかをつくるというものです。恐らく「ウサギ」と「カンガルー」の違いを表現する方が難しいと思いますので、ハンディをつけるということで6年生に頑張ってもらいます〉 	<ul style="list-style-type: none"> ・扱う曲の順は以下の通り ①「ライオン」を聴きながら、表現方法について検討する ②「大きな鳥籠」(小鳥)と「白鳥」について比較検討する ③「カメ」「ゾウ」について比較検討する ④「カンガルー」「耳の長い登場人物」について比較検討する
展開・分習	<p>【ブレイクアウトセッション】による「分習」 ※それぞれの教室の様子は〈3(2)②および③〉に後掲</p> <p>○動物を音楽で表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の板書を参考にして、「カメ」「ゾウ」／「ウサギ」「カンガルー」の類似点のある2種類の動物の表現上の違いを考慮しながら音楽による表現を練り上げる ・教室の楽器を自由に使いながら実験を繰り返す。STは音楽表現の言語化を支援する ・動物の映像を、反復して映示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・批評は、表現が完璧であったか、あるいは誤解が起きる可能性があるとするれば、さらにどのような表現にすればよいか等について検討する ・「『耳の長い登場人物』が『ウサギ』に聴こえないよ」という意見に対し〈実は、耳の長い登場人物というのは、『ロバ』のことなのです。道理でウサギに聴こえないはずですね〉と話し、先入観をもととすることへの注意を促す ○作曲家の作品を味わう ・ここまで扱った7曲を傾聴する
展開・全習	<p>○動物を音楽で表現したものについて検討し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず、浜頓別小学校4年生が「ゾウ」の表現を行う(クイズのため、相手の留萌緑丘小学校6年生には、『ゾウ』か『カメ』かは伝えない) ・〈しばらく2種類の動物の映像を流しますので、止まるまで演奏を続けてください〉 ・〈緑丘小のみなさん、今の表現は、「カメ」「ゾウ」のどちらだったと思いますか〉と問いかけ、回答結果を板書する ・正解(ゾウ)を公表し、正解・不正解の原因や改善策の検討を行う(不正解の場合は何が不足あるいは誤解を与えたのか、原因となったかの理由の検討を行う予定であったが全員が正解した) ・続いて、留萌緑丘小学校6年生「ウサギ」の表現を行う(クイズのため、相手の浜頓別小学校4年生には、『ウサギ』か『カンガルー』かは伝えない) ・〈しばらく2種類の動物の映像を流しますので、止まるまで演奏を続けてください〉 ・〈浜小のみなさん、今の表現は「ウサギ」「カンガルー」のどちらだったと思いますか〉と問いかけ、回答結果を板書する ・正解(ウサギ)を公表し、正解・不正解の原因や改善策の検討を行う 	<p>○音楽表現を楽しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級全体で、一斉に演奏する。合奏「サファリパーク」を表現する
まとめ	<p>○作曲家の作品について、表現方法を検討する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〈作曲家の作品をみんなで聴いて考えてみましょう〉 ・『動物の謝肉祭』を聴き、その表現方法について検討する。各曲について、CDを聴く(1曲あたり90秒程度)→意見を出し合う→楽曲に対する批評を行う、というサイクルで行う。その際、聴取と同時に動画(消音)を映示する 	<p>②浜頓別小学校の「分習」部分の記録 (T2・T3は学生。発言ママ)</p> <p>T2 浜小のみんなには、カメかゾウかをどちらかをやってもらんですけど、カメとゾウの映像を先に流してもらうので、カメとゾウの絵を見て、どんな特徴や違いがあるのかを考えながら見てみてください(動画視聴)</p> <p>T2 じゃあ、みんなには、ゾウの方をやってもらおうと思います</p> <p>C (手で丸をつくる=了解の意)</p> <p>T2 ゾウには、どんな見た目や動きの特徴、どんな特徴があるか、言ってみてください</p> <p>C ゆっくり</p> <p>C とにかく大きい</p> <p>C ゆっくりで、のっしのっしという感じ</p> <p>C ぞうさん、ぞうさん(歌う)</p> <p>T3 あとは?</p> <p>C ゾウは…</p> <p>C パオンって言う</p> <p>C 一個が長い</p> <p>C でかい音</p> <p>T3 でかい、とにかくでかい方がいい</p> <p>C 一個の音が長い方がいい</p> <p>T2 一個の音が長い、ね</p> <p>T3 (特徴を板書)</p> <p>T3 <u>でも、カメもゆっくりだから、という子もいましたね</u></p> <p>C <u>だから、間違いやすい</u></p>

- T 3 間違いやすいね
- T 2 じゃあ、カメとゾウの違いを一番表せる特徴ってなんだと思いますか
- C 大きさ
- T 3 大きさ！と、カメは歩く音どう？
- C ちっちゃい！
- T 3 カメは、静かに歩いてスーって感じで歩く？けど、ゾウは大きい音でのっしのっし歩く
- T 2 じゃあ、そのゾウののっし…ずしん？大きさ？歩く音だとかを、後ろにある楽器だとどんな楽器だとそういう音が表現できると思うかな
- C シンバル
- C 大太鼓
- C ドラ
- C ドラは長い方がいい
- C ベース
- C コンガ
- T 2 じゃあ、実際に叩いてもらえるかな？誰か
- C (挙手)
- T 3 (指名)
- C それぞれの楽器につく
- T 3 大太鼓からいくよ
- C (大太鼓を叩く)
- T おおー
- T 3 1回でいい？
- C いや
- T 3 何回か…どんな感じ？
- C どんどんどん
- C (何回か続けて叩く)
- T 2 速さはいい？
- C はい
- C でもちょっとでかい…
- T 3 シンバルは？
- C (叩く)
- T 3 上手だね
- C いや
- C なんか
- C パーーン
- C (叩く)
- C パーーン (身振りをつけながら)
- T 3 パーーン、くらいだって
- C こうしたらいいんじゃないの？
- C (叩き方を変えて2回叩く)
- C ちょっと速い
- C (叩き方を変えて叩く)
- T 3 大太鼓とシンバル、どっちをたくさん叩いた方がいい？
- C 大太鼓
- T 3 じゃあ、大太鼓2回にシンバル1回にしてみようか
- C (T 3の合図で叩く)
- T 3 どう？
- C いい
- T 3 どうでしょうか、今のところ
- T 2 すごくいいと思います
- T 3 ドラもいってみよう
- C (叩く)
- C (他の児童が様々な意見を言い、そのたびにドラのCは叩き方を変える。シンバルの子も合わせて叩く)
- T 3 大きさはどう？もっと大きい方がいい？
- C もうちょっと大きい方が
- C これくらいがいい
- T 3 これくらいがいい？(挙手を促し、大多数が「これくらいでよい」に手を挙げた後) じゃあ、気持ちもうちょっと大きくしよう
- C (数回叩く)
- C どうですか？(カメラに向かって)
- T 2 いいと思います！
- T 3 それならね、カメって勘違いされないと思う
- T 2 あと一分。あともうちょっとなんか、ゾウを表現するような、ないかな
- C バス！
- T 2 一つ注意点なんだけど、パオーンとかの鳴き声は言ったらだめね。すぐばれちゃうから
- C (バスに向かう)
- T 2 どの楽器使ってもいいから…
- C (バスを弾く)
- T 2 今、楽器持っていない子たちいるよね。座ってる子たちは、机とかで、大きい太鼓と同じようにバンって叩いて表現するのもいいかもしれない。シンバルみたいに手拍子したり
- C (体を動かします)
- ③留萌緑丘小学校の「分習」部分の記録
- (T 4・T 5は学生、担任教員はT 6、芳賀均はT 1。発言ママ)
- T 4 今日は、カンガルーとウサギの方の、ウサギをつくっていきたいと思います。じゃあ、カンガルーとウサギの映像を流してみるの、特徴を考えながら見てみてください
- C はい
- T 4・5 (ウサギとカンガルーの映像を二回ずつ流す)
- T 6 うさぎの印象を教えてください
- C 速い
- T 6 速い
- C 足を伸ばしている
- T 6 あー
- C 弱々しい
- T 6 弱々しい、なるほど
- T 5 (映像終了後) 一度見てもらいましたが、みなさんどうでしたか？ばっちり？

- C はい
 T 5 そしたら、これから使う楽器を決めたいと思うんですけど、ウサギってどんな特徴があるかな
 T 4 速いと、足を伸ばしているは出てきたけど、他には何かあったりしますか？
 C 小さい
 T 6 あとは？
 C 速い
 T 6 さっき言った
 C 弱々しい
 C 跳ねてる
 T 4 ジャあ逆に、カンガルーの方はどうでしたか？カンガルーも跳ねてましたよね。何が違うかな
 C 強い感じ
 T 6 強い
 C でかい
 C あと、高く飛ぶ
 C ちょっと、ウサギよりゆっくりな感じ
 C おー
 T 6 重たい感じかな。あとは？
 C 超大きい
 T 6 すごい大きかったよね
 C 筋肉ムキムキな感じ
 T 6 筋肉ムキムキな感じ！ そんな感じかな
 C 喧嘩っ早い
 T 6 喧嘩っ早い！ そんな感じらしいです
 T 1 ジャあ、楽器準備してやってみようか。やりながら工夫してみようか
 T 4 何の楽器を使おうか。ジャあ、速いっていう表現を使いたいときは？
 C タンバリン！
 T 6 タンバリンね
 C あと、和太鼓
 C 鈴
 T 5 よし、ジャあ早速やってみますか。楽器はありますか？
 C はい
 T 6 ジャあ、使ってみたい、こんなのが合うんじゃないかと思う楽器を持ってきてください。木琴、鉄琴も1台ずつあるので、使いたい人は取って来てください。どうぞ
 C (楽器を取りに行く。様々試す)
 T 6 ウサギの、跳ねてるちゃんとやるんだよ。跳ねてるってどんな感じ？ ああ、リズムがこんな感じね。あとなんだ、忙しくない感じは、ちょっとリズム速い感じかな。でも弱々しいって書いてるよ (T 6 が特徴を確認したことに、発言や発音で応えている)
 T 6 とりあえずみんなでやってみるよ。いっせーのーで
 C (演奏)
 T 6 どこ直したらいい？ 直すところあるかな

- C もうちょっと小さくする
 T 6 もうちょっと小さい方がいい。ジャあ、みんな控えめ。もう一回いくよ
 C (演奏)
 T 6 どうだい？
 C 違うのにする
 T 6 わかった、違うのにしてみよう
 C ピアノ
 C (演奏)
 T 6 大きい楽器以外の人は自分の席戻ろうか
 C (席に戻る。戻りながらも、様々話し合っている)
 T 6 ジャあまとめるね。どちらかという、高い音で、弱々しい感じ、音控えめで、リズムは、リズム○○だけど、ちょっと速い。で、いいですか？
 C はい
 T 6 よし。これ、一発で伝わったら最高だね
 T 1 大学生のみなさん、何かアイデアがあったらさらに、ちょっとみんな演奏してみてもいいかな
 C (まだ試行錯誤できると分かり、演奏)
 T 4 いいと思います
 T 5 すごいかわいい感じとか、小さい感じします
 T 6 こうしたらいいとかありますか？
 T 5 さっき速くって言っていたから、もうちょっとトントントンと速くしたらどうかな
 C 分かりました
 C (少し試した後、演奏)

分習における②および③の逐語録からは、相手の学級に対して表現を行うという必然性から、担任教師を含めた学級全体で対話をしながら表現を工夫し(下線を付した部分)練り上げている(二重下線を付した部分)様子を読み取ることができる。

4 実践参加者の感想文の記述の検討

(1) 児童の感想文の分析結果

① 浜頓別小学校4年生(16名)

浜頓別小学校4年生の授業後の感想文をSCAT¹⁸⁾の手法を参考にして分析した結果は、以下の通りである。

- ・オンライン会議システムによって距離の離れた他者と関わったことや表現が伝わったことから、活動に対するやりがいを感じている
- ・容易なことばかりではない表現が伝わったことで、達成感をもったり自信がついたりして、学習意欲が増加している

以上の結果から、「本実践を行った4年生は、オンライン会議システムによって他者と関わったことや表現が伝わることにやりがいを感じている。容易なことばかりではな

い表現が伝わることで、達成感や自信をもち、学習意欲が増加している」ということが明らかになった。

なお、さらに追究すべき点・課題としては、自分たちの行った表現について、相手の学級に「クイズで当ててもらったから表現に自信がついたのか、考えている過程から自信があったのか」という点が見いだされた。表現という活動において、どのような条件下において、どの段階で自信をもてるか、検討することによって、より有効な指導につながる可能性がある。

②留萌市立緑丘小学校6年生(29名)

留萌市立緑丘小学校6年生の授業後の感想文をSCATの手法を参考にして分析した結果は、以下の通りである。

- ・他の児童の意見を聞いたり、それらの意見を聞くことで自分の価値観が変わったりしたこと、活動に対するやりがいを感じている
- ・表現を行う困難さを実感したことによって、他者のつくった音楽のすばらしさを感じたり、自身が学習に取り組む原動力につながったりしている

以上の結果から、「本実践を行った6年生は、他の児童の意見を聞いたり、それらの意見を聞くことで自分の価値観が変わったりしたことに活動のやりがいを感じている。また、表現を行う困難さを実感することで、他者のつくった音楽への敬意や自身が学習に取り組む原動力につながっている」ということが明らかになった。

なお、さらに追究すべき点・課題は見いだされなかった。

(2) 参加した学生の感想文の分析結果

参加した学生の感想文をSCATの手法を参考にして分析した結果は、以下の通りである(参加学生は見学を含め9名。授業実践に参加した者は6名中5名より回答を得た)。

- ・実践前に想像していたよりも、児童が盛んに考えたり発言したりしている様子を見て、児童が発揮する想像力や考える力に感心している
- ・試行錯誤している児童の様子を見て、教員として指導することへの意欲が向上している
- ・自分たちが考えたことを組み込んだ授業が実現できたことで、達成感を味わっている

以上の結果から、「参加した学生は、実践前に自分たちが想像していたよりも児童が考えたり発言したりしている様子を見て、児童が発揮する想像力や考える力に感心している。また、そのような児童の姿から、教員として指導することに対する意欲が向上している。さらに、自分たちが考えたことが組み込まれた授業が実現されたことで、達成感を得ている」ということが明らかになった。

(3) 参加した教員の感想文の分析結果

実践に参加した教員の感想文をSCATの手法を参考にして分析した結果は、以下の通りである(見学を含めた8名の教員のうち3名より感想文を得た)。

- ・児童が他校の児童と交流して多様性を認められることで、表現の幅が広がったことや、児童が主体となる授業の方法について体感している
- ・教員にとって、日頃の授業づくりの悩みが解消されたほか、学生たちの授業に関わる様子等から、自身の業務への意欲が向上している
- ・ワークシートを書いたり、丁寧に考えたりする時間が不足していると感じており、配当時間について改善する余地があると考えている

以上の結果から、「授業を実施・参観した教員は、児童が他校の児童と交流して多様性を認められることで、表現の幅が広がったことや、児童が主体となる授業の方法について体感した。日頃の授業づくりの悩みが解消されたほか、学生たちの授業に関わる様子等から、自身の業務への意欲が向上した。一方、配当時間についての改善の必要性を感じることを通して、授業づくりについて考える機会となった」ということが明らかになった。

なお、さらに追究すべき点・課題としては、学校間の交流における、「即時的なやり取りと、お互いの感想発表を聞きあうこととの差異」「学生の感想を聞く機会の確保」について見いだされた。異なる学校同士の意見交流において、どのような方法をどのような場面で行うか、また、参加学生から感想を聞く機会の確保ということを検討することによって、より有効な指導につながる可能性がある。

5 本実践のまとめ

へき地・小規模校における、児童数の少なさに起因する「固定したメンバーによる話し合いでは、考えの多様性に乏しい」「刺激が少なく学習意欲が低迷する」といった問題緩和のため、オンラインによって異なる複数の小学校と大学の研究室とを結び、集合学習の方法を取り入れた音楽の授業を試みた。そのことで、へき地をはじめとする地域の人的資源(音楽を専攻した教員が少ない)の補助や、児童の学習環境に変化と刺激を与えて、学習意欲の向上に資することをねらった。そうした実践に関し、実践に参加した学生や児童、教員の感想を分析し、検討した。

その結果、本実践を行った4年生(下学年)には、やりがいや達成感、自信をもち、学習意欲の増加が、6年生(上学年)には、価値観の変容や活動のやりがい、他者の作品への敬意や学習意欲の向上が得られたことが分かった。TTおよび見学で参加した学生には、児童が発揮する想像力や考える力への感心や教員として指導することに対する意欲の向上が、授業を実施・参観した教員には、日頃の授

業づくりの悩みの解消や自身の業務への意欲の向上が得られ、授業づくりについて考える機会となったことが明らかになった。

「集合学習」の方法を取り入れ、距離の大きく離れた学校同士、さらに大学ともオンライン会議システムで結んだ形による本実践の試みには、多様性に乏しい、刺激が少なく学習意欲が低迷する、といったハンディキャップともいえる状況の緩和に向けて、様々な側面からへき地・小規模校教育の充実に資する可能性が示唆された。本実践における試みから得られた示唆を生かした様々な実践が盛んに行われることを望みたい。

註

- 1) 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編著『豊かな心を育むへき地・小規模校教育 少子化時代の学校の可能性』学事出版、2019.
- 2) 日本音楽教育学会第50回東京大会（2019.10.20.東京藝術大学）における発表（芳賀均・大野紗依）。および、芳賀均・大野紗依「複式学級における学年別指導による音楽の授業の検討―へき地校における異題材指導の実践を通して―」『へき地教育研究』75、北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター、2021、pp.47-54.
- 3) 日本音楽教育学会第51回大会（2020.10.17.オンライン開催）における発表（芳賀均・藤井真衣）。および、芳賀均・藤井真衣「複複式の学年別指導における音楽授業の単式授業への転用」『へき地教育研究』76、北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター、2022、pp.29-38.
- 4) 『へき地・複式・小規模教育の手引き―学習指導の新たな展開―』北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター、2021、p.63.に「近隣の複式学級の子どもを一か所に集めて各領域の指導計画の一部について学習をする。普段より多い人数で学習できるので、集団の中での練り合いなどが行いやすい。体育科のボールゲームなどでよく取り入れられている。集団で学習する関係学校の教師の協力教授組織（T・T）を充実させる必要がある。事前の綿密な打ち合わせが不可欠」とある。
- 5) 平成29年度第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会第6分科会、弟子屈町立奥春別小学校における集合学習の公開（9月22日）。弟子屈町立和琴小学校4名、美留和小学校2名、奥春別小学校4名。第1・2学年。
- 6) 前掲5)の大会における研究紀要、2017（H29）、p.1.参照。
- 7) 前掲書4)に「集合学習において、2校以上の児童生徒が共同で行う学習活動」と解説されている。
- 8) 前掲書4)に「集合学習で、共同で行う学習の効果を高めるために、各校での事前事後の学習活動を行うこと」と解説されている。
- 9) 前掲書4)、p.64.に「学校規模や生活環境の異なる学校（へき地の小規模校と都市の大規模校など）が姉妹校的な関係を結び、それぞれの学校で経験できない学習を行うことをいう。交流学習や合同学習などを通して生活体験を広め、学習意欲の向上及び社会性の伸長を図るとともに、積極的な活力ある人間性を育成することをねらいとするものである。近年では、インターネットやマルチメディアを導入した交流を積極的に展開している学校が多くなってきている」と解説されている。
- 10) 前掲書4)、p.64.
- 11) 令和2年2月7日から実施された「コロナウイルス感染拡大防止のための全国一斉の休校」への対応を契機として、GIGAスクールの予算措置が前倒しされた。加えて、補正予算も令和2年度に組まれ、小学校1年生から中学校3年生まで、「児童生徒向け1人1台端末の整備の実現」が令和2年度中に完了する流れとなった。
- 12) GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想。「1人1台端末によって家庭でもつながる通信環境の整備など、ハード、ソフト、人材を一体とした整備を加速することで、災害や感染症の発生などによる学校の臨時休校などの緊急時においても、ICTの活用によりすべての子供たちの学びを保障できる環境を早急に実現すること」を目的とした構想。
- 13) 日本電信電話株式会社「2017年3月期 第2四半期決算補足資料」<http://ke.kabupro.jp/tsp/20161111/140120161111437973.pdf> [2021.9.1.13:38.閲覧]
- 14) 人口カバー率というのは、へき地にとって適切な表示方法といえるか疑問をもたざるをえない。本実践に関わる宗谷管内（宗谷総合振興局のホームページを参照、URLは後掲）を例にとると、総面積は4,625.13km²で全道総面積の約5.5%を占め、ほぼ京都府の面積に匹敵するが、その総人口は「73,449人で、全道の約1.3%」を占めるとある（平成22年度の国勢調査（速報値））。北海道内においてすら1%強に留まるのであるから、全国比となれば極めて小さい数値になることが明らかである。上記から、人口カバー率が東日本で95%ということは、面積としては、かなり広大な範囲がカバーされていないということが疑念をもって想像される表示方法ではないだろうか。
<https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/gaiyo/index.html>および、
https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/gaiyo/gaiyo_03.html [2021.9.1.13:49.閲覧]
- 15) 芳賀均・西山洋平・大野紗依・森健一郎・芳賀真衣「音楽出前授業の教員養成としての効果とオンライン出前授業」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』72（2）、2022、pp.275-288.
- 16) おりしもGIGAスクール構想の下、「児童生徒向け1人1台端末の整備の実現」が完了している状況であっ

た。本実践より前に、浜頓別町立浜頓別小学校においては、通常の活動を行っている教室ではなく音楽室を使用する形によって、留萌市立緑丘小学校においては、児童の密集を回避しつつ、教室で実施する方法で、小学校と大学をオンライン会議システムで結んだ音楽授業を実践済みであった。

- 17) 芳賀均「知覚と感受の間に知識を位置付ける板書の工夫」、および、大野紗依・芳賀均「対話的な学びによって児童が楽器の奏法を身に付ける音楽の授業」。いずれも、日本学校教育実践学会第25回大会（2020.11.21、ウェブ開催）における発表。
- 18) SCAT (Steps for Coding and Theorization) は、質的データ分析のための手法の一つである。4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である。大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要（教育科学）』（第54巻第2号）名古屋大学大学院教育発達科学研究科、2008, pp.27-44.および、大谷尚『質的研究の考え方－研究方法論からSCATによる分析まで－』名古屋大学出版会、2019.本稿では、SCATの手法を参考にして、児童や学生、教員の感想文をコード化して整理した。その際、正当なSCATの効果を損ねる可能性を踏まえつつ、全体の傾向を捉えるために、本来であれば不適であると考えられる短い文も一連の作業として行ったり、複数のコメントをまとめたりした。

本稿の〈2 (1)〉は森が、〈4〉は大野が、〈3 (2) ①〉の実践に使用する学習指導案作成は学生の要望をもとに芳賀均が担当した。それ以外の部分については、五者の共同によって行ったため分別は不可能である。作稿においては、〈2 (1)〉を森が、〈3 (2) ②〉を芳賀真衣が、〈3 (2) ③〉〈4〉を大野が、それ以外の部分を芳賀均が担当した。

[附記4]

〈4〉におけるSCATの分析表は紙幅の都合上掲載できなかったため、査読時に別添提出した。

[謝辞]

本実践において、留萌市立緑丘小学校の佐々木唯衣教諭・高橋知子教諭に多大なるご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

[附記1]

本稿は、日本音楽教育学会 第51回大会 オンライン大会 (2021.10.16.) における発表 (芳賀均・森健一郎・芳賀真衣・大野紗依「へき地校等と大学とをオンライン会議システムで結んだ授業の実践 へき地校と市部の学校とによる集合学習の試み」) の内容の一部を再構成してまとめたものである。

[附記2]

本研究は、令和3年度北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター「へき地・小規模校教育に関する実践研究 (個人調査研究費)」および共同研究推進経費「北海道におけるへき地複式校間のICT活用による相互遠隔授業の調査研究」の適用を受けた。

[附記3]